

「島原領・多比良村轟木名の人々と生活」

松尾 卓次

1、初めに

長崎県雲仙市国見町多比良地区に轟木名という戸数170戸余の一集落がある。この地は雲仙岳から北に延びた裾野の末端にあたり、そこには肥沃な耕地が広がっている。ここは古くから村の中心地で、江戸時代には島原藩多比良村庄屋が置かれていた。

ここに、江戸時代末期の村人の生活を調査した1冊の文書が残されている。その名を『竈六段人別職業調』といい、ここ轟木名の100戸のデータベースである。

この文書は、戦後間もなく発刊された『多比良町郷土誌』にもその一部が紹介されたが、調査研究が十分なされていないえなかつた。江戸時代の島原地方の農村生活の実態がよく現されている。この貴重な史料を研究して、我らがご先祖様の苦勞の跡を偲びたいと思う。

2、「竈六段人別職業調」のあらまし

この文書の作成の様子について先ず述べる。綴じ込まれている文書に、「長崎異変乃節人馬水夫割」「長崎表江異国船渡来之節不時御

見廻被仰出御通知節村々手続」「長崎即刻出亦不時御見廻馬割―多比良村」「長崎不時御見廻水夫割―多比良村」「指上申五人組證文之事」「役職之ケ条」「轟木名名字組一覽」で、藩庁からの通知文書を含んでいる。そしてこの文書である。

この文書が編纂されたのは戊午年（安政5・1858年）である。この時期は、1853年のロシア・プチャーチン艦隊の長崎入港以来、米、英、仏など外国艦隊の長崎入港が相次ぎ、島原藩はそのたびに藩兵を派遣して長崎警備に当たっていた。

このような時代に、藩庁は各村へ人馬の動員を命じ、その準備をさせていた。多比良村でもそれに備えて村人の実態を把握する必要上、この文書をとりとまとめたのであろう。轟木名には庄屋が置かれていた地であるから、そのモデル地として作成したのであろう。村内他名や領内33か村で、この種の文書の内容は聞いたことがない。

その内容は、資料①のように、各様式に基づいて、

「経済状況」「仕事」「耕地所有面積」「馬所有」「家屋の広さ（小屋、土蔵を含む）」「井戸の有無」「家頭以下家族の状況（異動も含む）」「所属五人組名」等で、安政5年から元治2年までの8年にわたる記録が読み取れる。現在の戸籍簿、住民台帳と課税台帳を兼ね備えたようなものである。村人の実態を明らかにした、実に貴重な文書といえよう。

3、轟木名の人々

轟木名は100戸で、人口493名(男230、女263)であった(千年・1858年)。1戸あたり4.98人となる。1975(昭和50)年当時の国勢調査で、現在は162戸、705人(4.3人/戸)である。

この年の年齢別構成を見ると表①のように、子どもが多くて老人層が少ない。最高年齢者は83歳である。これはどこでもそうで、多産多死型で、平均余命が短かったからである。(平均年齢29歳、現在は37歳)

人口の推移を見ると、表②のように、初めの2年間は増加していたがその後は次第に減少している。そして7年間に32人、つまり6%減である。これは、1861〜3年にわたって毎年20〜25人が病死した事による。

7年間での出生は84人で、死亡は96人と自然減12。転入は43人しかないので、転出は62人と社会減18。この転出中21人が「行違」といって行方不明の人である。死亡は毎年6〜9人であったが、61年8月に6人、9月に5人、62年8月に7人と夏期に集中している。これは疫病などの流行によるもの。死者100人中に、1〜5歳児が37人、6〜10歳児が11人と、死者の半分を占める。幼い子どもがいかに犠牲となったことか。1863(文久3)年には25人死亡と、目立っている。この年7月にはコレラ

がやはり、冬には疱瘡が流行するという最悪の年であった。

養子・嫁取りの例

転出入先を調べると、表③のように同名内や村内が圧倒的に多い。隣村の土黒村や湯江村からもあるが、かなり少ない。他に大野・三会・西郷・島原・伊福・三室・深江各村が1〜2人見られるくらい。つまり三分の一が同名内、また三分の一が同村内と、通婚圏がきわめて狭い。注目すべき事はすぐ近くの神代村との縁組みが0であること。これは他領であったから結びつきが全くなかったのである。

それで名内33戸が親戚関係にあり、嫁を、養子のやりとりしている。これまた閉鎖社会であったから、気心知れた近隣を選んでいたのである。

7年間に27人が嫁入りしているが、16歳から33歳(後家を含むと50歳)で、平均年齢20歳である。かなり早婚である。

連以(れい)の結婚

結婚の例を彼女に見る。連以は家頭・金左衛門の跡取り祐太郎(24歳)・たみ(22歳)の長女として弘化4(1847)年に生まれた。家の経済状況は「中」で、7反9畝の土地持ちで、馬3匹を持つ馬世話役である。16歳になった元治元(1864)年、同名の菊次郎(17歳)と結婚する。

菊次郎は久世増右衛門・くちの長男。家は名字持ち、経済状況は

「中」である。惣組頭をしていて、耕地1町2反6畝、馬2匹所有と豊かである。よく言う釣り合いのとれた縁組みである。

しかし、幸せな暮らしは長く続かなかつた。2年後の文久2年11月に連以は死亡。死因は不明だが、前年痲瘡が流行しているので病死なのか。子どもはいなかつた。その後の菊次郎はどうなったか、記録はないが、悲劇のヒロインを見る思いがする。

王佐(わさ)・とし母子の行違

王佐(55歳)は金蔵(57歳)の妻で、とし(18歳)はその2女である。家の経済状況は「極貧」で、日雇い稼ぎで生活していた。長女の春み(すみ・35歳)は既に土黒村に縁付き、子の勘太郎(13歳)もいる。この母子が父親を残して万延元(1860)年4月に行違である。どんな事情があつたのか。

その前年には日照りが続き、ただでさえも苦しい生活が追いつめられたのか。貧困で、年頃の娘は嫁にも行けないので、新しい生活を他所に求めて村を去つたのか。金蔵は五人組のしがらみで1人村に残つたのであろう。これまた村の悲劇である。

4、轟木名の暮らし

この文書では、経済状況を次のように分類している(表⑤)。

この階層と耕地所有状況(表⑥)の関連を調べると、この地の経済生活が浮かび上がる。

耕地を有しない家が15戸ある。所有しているといつても最小は畑24歩で、最大は1町4反3畝9歩となっている。名内で53町2反1畝18歩を所有し、土地持ちは85戸であるから、1戸あたり平均6反2畝18歩となる。昭和50年農業センサスでは、現轟木名に農家が101戸あつて、66町1反を経営しているから、1戸あたり6.5反となる。意外なことに、昔と変わらぬ農業経営である。

江戸時代の経済は農業に立脚していたから、耕地の有無が各家の経済生活を左右していた。耕地無しや狭い土地しか持ち得なかつた家は、有効な生産手段を持ってないので生活を満足できなかつた。それで5反未満の所有者に貧困層が目立つ。反面、4反しか所有しない家で「上々」層がある。ここは酒造株を持ち、農業収入以外にも収入が多かつたためである。貧富の差が大きかつたことがよく分かる。

当時の重要な生産手段である馬の所有を調べると、57戸が83頭を持つている。1頭所有が38戸(45%)、2頭が12戸、3頭5戸、4頭2戸となる。村の3分の1(28戸)が馬を持ってない状況であつた。貧困層の馬持ちは11戸しかないが、4反以上の家がほぼ全家所有している。

江戸時代もこの期になると、各村が変わりはじめていた。貨幣経済が広がり、村々にも農業以外の産業を普及してくる。轟木名内でも農業以外に仕事を持つ家が目立つ。

100戸中84戸が耕地持ちであるが、その26%が兼業農家と

なっている。その仕事は酒造、医師、馬医、馬仕入、馬世話役、紺屋(2戸)、蠟絞(2戸)、豆腐屋(3戸)、大工(5)、左官(2)、大鋸、下駄作、倉包など22戸あった。土地無しのものでは、竹細工(2)、素麺作、蠟絞手(4)、日雇いなどが見られる。

島原藩では特産物であったハゼ・木ロウの生産が盛んであった。各村に板場(蠟絞)がその生産の中心となっていた。轟木名にも2軒の板場があつて、名内で4人の絞手が雇われている。その他にも紺屋があつて、また素麺や豆腐など製造業が広まっていたことが分かる。

農業以外の産業で現金収入の場が広がり、村人の生活を変えていったことであろう。蠟絞手の賃金は1日175〜155文であったから、いい稼ぎになっていたろう。

名内で名字を持っている家が12戸ある。村里(庄屋)、植木(乙名)以外に松尾(酒造株)、久保(蠟絞株)、植木(医師)、村里、渡辺(乙名手伝)などがある。「中上」層以上はすべて名字を持ち、「中」で2割、「下」でも7%が持っている。かなり名字が広まっていたといえよう。

島原藩では、寛政の大地変後(1792年)の財政建て直しに、領内より広く献金を求め、寸志制を設けていた。1貫目で御目見格、2貫目で名字御免、4貫目で御紋上下拝領、11貫目で帯刀御免といわれていた。馬医・兼字の三男弥四郎(1844/天保15年生)は、慶応元年に1貫目を献上して名字御免となり、野口と称した。その家が今も続く野口家である。身分階層の崩壊が見られる。

5、轟木名の住まい

村人は五人組制度のもとに生活していた。それを轟木名で見ると、惣組が「い」「ろ」「は」「に」と4つあり、それぞれに3〜5の組が含まれていた。そこに惣組頭、組頭がいて管理と世話に当たっていた。(資料② 轟木名図参照)

「い字組」は伊代治が惣組頭で29戸をまとめる。1番組が甚太郎ら5戸、2番組が富蔵ら7戸、3番組が用助ら5戸、4番組が永太郎ら6戸となっていて、立小路一帯で暮らしていた。

「ろ字組」の惣組頭は戸右衛門で、19戸が峠の尾一帯にある。1番組が利右衛門ら3戸、2番組が勝太郎ら4戸、3番組が稲蔵ら7戸、4番組が金左衛門ら5戸。

「は字組」は惣組頭が村里忠右衛門で21戸が須崎一帯をまとめていた。1番組が甚左衛門ら4戸、2番組が茂七ら3戸、3番組が政右衛門ら5戸、4番組が吉田勘右衛門ら4戸、5番組が村里文左衛門ら6戸であった。

「に字組」の惣組頭は松尾小左衛門で21戸、陣一帯に分布している。1番組が松蔵ら7戸、2番組が常太郎ら8戸、3番組が半右衛門ら7戸となっている。

住居を見ると、母屋の一番小さい所で3坪(2間×1.5間)で、一番大きな家は106.25坪(8.5間×12.5間)もある。平均すると11坪半、つまり2間×5.5間である。経済状況と家屋に広さの関連をあらわすと、表⑥のようになる。大邸宅の所有者は

酒造株の家で、ずば抜けて広い。

一方では3坪家屋に「貧困」層など5戸が暮らす。この家屋の間取りを図示すると左図のようになる。4畳の居間と1坪の土間（出入口と台所、作業場）とで成り立つが、町人の長屋と同じ規模か。住環境一つを取ってみても、当時の農民生活がどうだったかよく分かる。

当時の典型的な家屋が隣の馬場名に残っているが、広さは10坪（ゲアーは含まない）で、「田の字」型の間取りである。入口に続いて土間があり、そこが作業場兼倉庫、台所になっている。左手に居間があり、手前に上がり口、奥の方に囲炉裏がある。座敷には仏壇があり、その奥に納戸がある。もちろん屋根は藁葺きである。当時は1間梁が普通で、それ以上は木材の都合で作れなかった。梁間2・5間の家をゴジューバリといって、特別扱いにしていたようだ。そのような家は庄屋宅と酒造株の家など数軒しかなかったろう。瓦葺家は酒造株屋と蠟絞株屋2軒のみであった。（庄屋と乙名家は調査外で除く）

農家につきものの小屋は8割の家が持つ。2軒の小屋をもったり、土蔵のある家も多い。井戸は2・4軒しか有しない。「極貧」層では3軒しか持っていないのである。住環境を見ても、これまた貧富の差がはつきりしている（表①）。

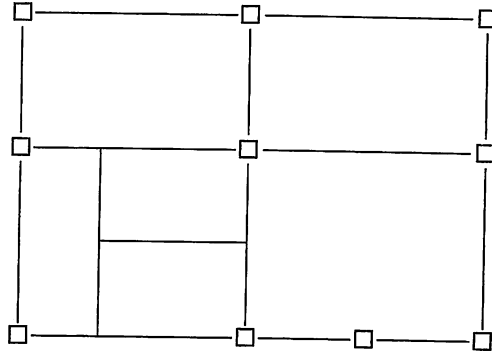
6、終わりに

『竈六段人別職業調』を元に、江戸時代末期の村を調べてみた。島原地方の農村と農民の実態がおぼろげながら理解できたと思う。とにかく、現在と大きく違い、貧富の差が大きい。また人の命が簡単に奪われていて、たくさんの人々が満足な一生を送れていない。しかし人々は生き抜いてきた。轟木名100戸、493人はその後どうなったろうか。

この文書が作成されて9年後に明治維新を迎える。1871（明治4）年には島原藩が消滅し、庄屋制も終わる。今までは毎年の宗門改めで、勝手に離村はできなかつたが、これからは自由居住と職業選択ができるようになった。農民にも名字が認められ、田畑勝手作、土地の永代売買の禁も解かれた。つまり自由な社会となり、自由経済の中に投入されたのである。また学校教育もでき、新制度が急速に広まった。

この新制度下に人々の暮らしはどう変わったろうか。極貧の人々はやはり土地を持ってなくて、江戸時代とあまり変わることもなく生活したろう。また豊かだった家が、その後の経済の激変で没落したところもあつたろう。轟木名の土地の生き続けた人たちのその後を物語るものに、営々と続く家屋敷がある。また菩提寺の過去帳や、名の共同墓地の墓碑にそれを刻んでいる。それらを見ると、立派に生き抜いてきたものだとして強く感じる。私たちが存在するのも、そういうご先祖様のおかげである。この文書の解読研究を通して、その

意を強くする。



〈 3坪家屋 〉

〈主な参考文献〉

「竈六段人別職業調」(松尾耕之助氏蔵)

松尾貞明著「多比良町郷土誌」(多比良町役場刊)

島原市編「島原の歴史」(藩政編)(島原市役所刊)

(終わり)

(湯けむり史学寄稿) 多比良村轟木名の図表一覧

<表① 年齢別構成表>

| 歳 | 1~4 | 5~ | 10~ | 15~ | 20~ | 25~ | 30~ | 35~ | 40~ | 45~ | 50~ | 55~ | 60~ | 65~ | 70~ | 75~ | 80~ |
|-----|-----|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 人 | 48 | 52 | 49 | 55 | 41 | 40 | 37 | 32 | 31 | 26 | 21 | 18 | 15 | 10 | 5 | 2 | 1 |
| % | 9.9 | 10.7 | 10.1 | 11.4 | 8.3 | 8.5 | 7.7 | 6.6 | 6.4 | 5.4 | 4.4 | 3.7 | 3.1 | 2.1 | 1.0 | 0.4 | 0.2 |
| '75 | 6.6 | 8.1 | 9.2 | 8.9 | 6.5 | 6.9 | 4.9 | 5.7 | 6.2 | 7.6 | 6.3 | 5.1 | 4.9 | 4.5 | 3.9 | 2.6 | 2.1 |

<表② 人口推移表>

| 年 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 人口 | 493 | 500 | 508 | 500 | 484 | 478 | 461 |
| 出生数 | 18 | 17 | 14 | 10 | 10 | 8 | 7 |
| 死亡数 | 10 | 8 | 7 | 23 | 18 | 25 | 5 |
| 転入数 | 0 | 15 | 1 | 6 | 9 | 4 | 8 |
| 転出数 | 1 | 16 | 16 | 9 | 7 | 3 | 9 |

<表③ 転出入先>

| 地名 | 名内 | 村内 | 土黒村 | 湯江村 | その他 |
|-------|----|----|-----|-----|-----|
| 入(71) | 28 | 24 | 5 | 9 | 3 |
| 出(62) | 23 | 20 | 10 | 3 | 6 |

<表④ 養子・嫁入り年齢>

| 年齢 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 29 | 33 | 他 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 嫁入 | 1 | 1 | 2 | 2 | 3 | 3 | 2 | 5 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 |
| 養子 | 1 | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | |

<表⑤ 基層別経済状況>

| 階層 | 不明 | 家無 | 極貧 | 下々 | 下 | 中 | 中上 | 上 | 上々 | 他(庄屋乙名) |
|----|----|-----|------|-----|------|------|-----|-----|-----|---------|
| 戸数 | 1 | 5 | 29 | 4 | 43 | 10 | 3 | 1 | 1 | 2 |
| % | | 5.2 | 30.0 | 4.2 | 44.8 | 10.4 | 3.1 | 1.0 | 1.0 | |

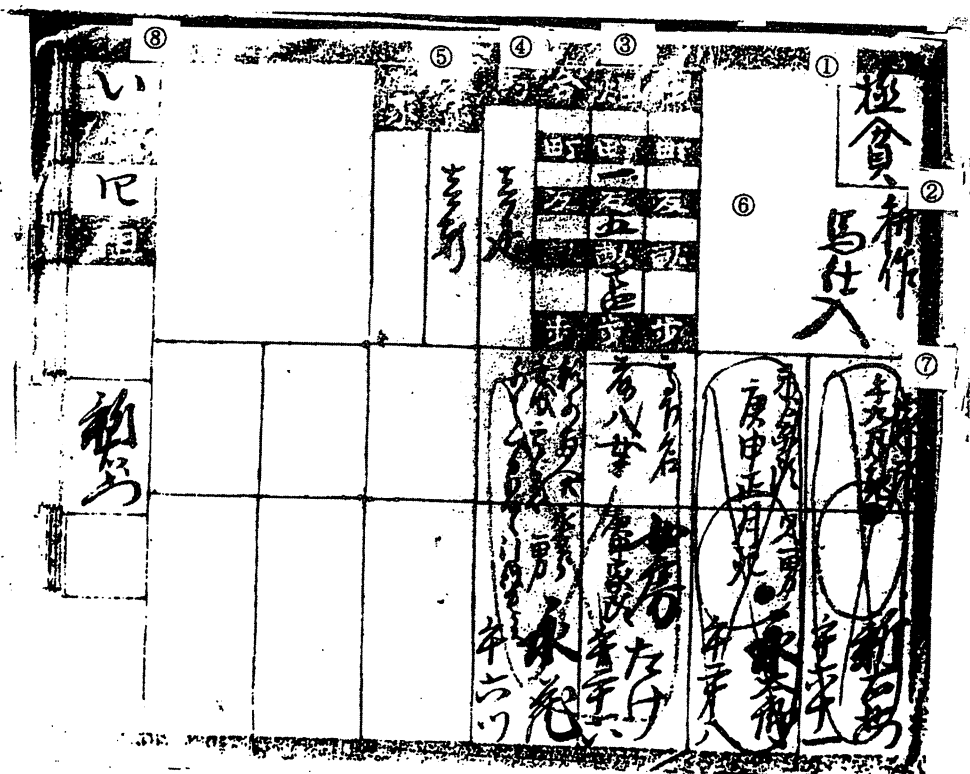
<表⑥ 階層別耕地所有状況>

| 反 | 0 | 0-1 | 1- | 2- | 3- | 4- | 5- | 6- | 7- | 8- | 9- | 10- | 11- | 12- | 13- | 14- |
|----|---|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 上々 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 上 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| 中上 | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | 1 |
| 中 | | | 1 | | | | | | 2 | 1 | | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 下 | | | 1 | 2 | 1 | 6 | 11 | 6 | 7 | 1 | 2 | 3 | 2 | 1 | | |
| 下々 | | 1 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| 極貧 | 4 | 1 | 2 | 4 | 5 | 2 | 8 | | | | | | | | | |
| 家無 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | |

<表⑦ 経済状況と家屋面積>

| 坪 | 3 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16.5 | 19 | 20 | 21 | 106 |
|----|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|------|----|----|----|-----|
| 上々 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 上 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| 中上 | | | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | | 1 | | | |
| 中 | | | | | | | | | 4 | 3 | 2 | | | | 1 | 1 | |
| 下 | | | 2 | 1 | | 5 | 3 | 10 | 8 | 2 | | | 2 | | | | |
| 下々 | 1 | 2 | | | 4 | | 1 | | | | | | 2 | | | | |
| 貧困 | 4 | | 8 | | 4 | | 3 | 4 | | | | | | | | | |

資料①「個表」



資料②「轟木名図」

